

神様の気紛れで転生し
たらエリート妖精に
なっていました

儂く散りゆくヤマザクラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

駆け出しの技術工、五十嵐玲一。

超適当な神様の気紛れでエリート妖精となって艦これの世界に転生してしまいました。

生きてゆく為に、必死で神様の無茶ぶりにつきあいます。

うp主は小説初心者です。

温かい目で見守ってくれると嬉しいです。

不定期投稿になります。(超重要)

以上がダメな人はブラウザバックを推奨します。

7 / 12 第4話を編集しました。設定の食い違いが見られたためです。

7 / 15 主人公チート / ご都合主義 / 台本形式 タグを追加しました。

また、感想入力時の一言欄を削除しました。

8 / 2 休載いたします。詳細はこちら↓ <https://syosetu.o>

[rg/?mode=kappa|view&kid=243510&](https://syosetu.o)

[uid=321280](https://syosetu.o)

8 / 15 復活したのです！ 需要が気になるのです！↓ <https://syosetu.o>

[rg/?mode=kappa|view&kid=24441](https://syosetu.o)

[0&uid=321280](https://syosetu.o)

目次

妖精さんとして

プロローグ　　く神様がやってきたので
すがてきとーです　　――　　1

1話　　く神様の冊子と妖精のできるこ
と　　――　　6

2話　　く神様の冊子とエリート妖精の
できる事　　――　　10

3話　　く先輩妖精?　　――　　14
無人島からの脱出　　――　　呉鎮への紀行

4話　　く妖精さんとブラツクな情報察
り　　――　　18

5話　　く無人島からの脱出①　　く

22

6話　　く無人島からの脱出②　　く

27

7話　　くいざ大空へと　　――　　31

8話　　く鉄の雨　　――　　35

9話　　く着水用意!!?　　――　　39

10話　　く玲式大艇、着水す!　　く

42

11話　　くイ級攻防戦　　――　　45

12話　　く恋する乙女(妖精)　　く

48

13話　　く大発紀行　　――　　52

14話　　く玲式陸上無線電話機　　く

15話 〳鳳翔さんと鎮守府 玲一側

〳
|
61

16話 〳大発動艇玲型の力〳

17話 〳鳳翔さんと鎮守府 鳳翔側

〳
|
70

18話 〳ブラック提督の天敵〳

妖精さんとして

プロローグ 〽神様がやってきたのですがてきとーです

〽

「機具点検、よし！」

大きな声が小さな工房にこだまする。

彼は五十嵐玲一、去年工業高校を出たばかりの新米技師である…。

(〽〽〽から玲一視点)

「失礼します」

誰かがはいって来た。お客さんかな？

「すみませーん」

お客さんだなうん

店先まで出ていくと、神様のコスプレをしたかわいい娘が立っていた。

「お待たせして申し訳ございません。ご注文ですか？」

「はい。このネジをアルミニウム製のチタニウム合金メッキで10本…。」

あ。これあちこちたらいまわしにされた。パターンのやつだわ。だから、

「分かりました！おつくりしますね！」

といつてあげると、とても驚いたような顔になったあと、嬉しそうに表情を歪めた。かわい。すぐくかわいい。↑大事なので二回言った（心の中で）

注文書を書いてもらうと、名前の欄に、『某いたずら神様』と書いてあった。謎。

——その日の夜——

「めちやムズイ」

玲一は旋盤の前に座って唸っていた。

なんせサイズと構造がおかしい上に、規格が旧帝国海軍の規格なのである。

結局のところ、自分で1から作ればいいということに気づいたのは夜もだいぶ更けた頃だった……。

——翌日——

例の神様がネジを取りに来た。

完成させたねじを受け取ってもらうと、驚いた顔をしていた。

本当に何なのだろう。

眠いのでひるねをすることにした。

ー夢の中ー

例の神様が、

「あなたを妖精にしてあげるよー」

と言っていた。妖精ってなに？

ー現実ー

「うーん よくねt」

・・・(^ ω ^)

絶句した

目が覚めてみた世界は、真っ白で、

・・・隣に神様が寝ていた。

??? なにこの状況

現実逃避はよそう。いまはこの状況をどうするか考えるべきだ。うん。

でもどうするか。とりあえず、

「神様?をおこそう!!!」

「起きてください!」ユサユサ

起きる気配なし。

「起きてください!」ユツサユツサ

ダメだこれ。他にも色々試しているうちに神様が起きた。

「なんですかこれ」

「むにゃあ」

かわいい。かわいい。

「とにかく起きてください!!」

「ん、なに」

ようやく起きた。よし。情報の収集だ。

「ここはどこです？あなたは誰です？」「ああ、起きた」

「いや起きたじゃないですよなんですかこれ!!」

「いや、きみにさ、昨日ねじを作ってもらったよね？」

「はあ、それと何の関係が…」

「いま説明するからさあ」

神様によると…

・ 神様は異世界から来たらしい。

・ その世界では、「艦娘」と「深海棲艦」が戦争をしているらしい。

・ 艦娘とは、先の大戦で戦った艦の魂を「建造」することによって呼び出したものら

しい。

・その世界には、「鎮守府」があり、「提督」がいるらしい。

・鎮守府には「妖精」というそんざいがいて、いろいろ手助けしてくれるらしい。

・昨日作ったネジは、向こうの世界で作れる人がおらず、その人を探しにきていたらしい。

「それで今僕はどうなっているんですか？」

「んゝ、今ゝ。」

「君がいたの世界にはいなかったことになっているよ」ニコリ

ふふ、こわいいいいいいいい!!!

「てーことで、あなたはエリート妖精として頑張つてねゝ」

「ちよつとまて」

呼び止めようとしたが、その声が届く間もなく、僕の意識は落ちていくのだった。

神様「ふふ、頑張つてねえゝ。」

暢気なものだった。

1話　く神様の冊子と妖精のできることく

知らない天j… 知らない場所だ。あと、世界がとてもビッグサイズ、いや、僕は妖精さんとやらになっていたんだっけ。

ちよつと近くをまわってみますかね。

――10分後――

「もう、歩け、な、い、」

ぶつ倒れてしまった。

だがしかしわかったことがある。

此処の周辺には海岸が広がっていることと、何とか休めそうな岩陰があることを発見したのだ。

ふと、自分を見てみると、強化繊維で編まれた、略装の士官服を着ていた。ポケットを探ってみる。

「ん、なんだこれ」

それは一冊の冊子だった。

「まあ読んでみようかな」

1 ページ目

「基本的に妖精はとべるのですう。ー
と、書かれていた。」

「試しに”飛ぼう”とおもうと、フツーに飛べた。」

「飛べんじゃん!」

「キヤラの崩壊が懸念されたが今まで必死こいて歩いてきた100mほどの距離を1
0秒程で楽々飛べた。」

「さっきまでの苦労はなんだったのだろうか。」

「もう少し読んでみよう」

「ちよつとワクワクしてきていた。」

2 ページ目

「妖精が甘味があれば何も食べなくても大丈夫ですうー
とあった。」

「ポケットに入っていた最中を食べてみた。力が無尽蔵にわいてくるのを感じた。
なにこれ。謎。」

3 ページ目

11週間の合計睡眠時間は、できれば50時間、最低でも28時間はとることですう
できなくなることもあるですう 1
注. これを守らないと実力が一切出せないばかりか、何も

「七時間睡眠！」

「とは言っても電気がないから、寝なくてはいけないんだけどね」

暗くなってきたので、とりあえず岩陰に横になった。深海棲艦とやらの襲われては敵
わない。エリート妖精とはいうものの、知識が無ければ滅茶苦茶弱いのだ。

とりあえず神様から聞いたことやわかったことをまとめると、

・僕はエリート妖精になって、この世界に飛ばされてきた。

・この世界では、艦娘と深海棲艦が戦争をしていて、艦娘は人間を守ってくれる存在
であり、妖精はそれを手助けする存在である。

・エリート妖精は普通の妖精よりもいろいろなことができる

・冊子をなくすと何もできなくなって死ぬので、冊子を失ってはいけない。

「こんなもんか」

その後、彼の寝息が聞こえてくるのに、10分とかからなかった。

2話　　く神様の冊子とエリート妖精のできる事く

く此処が無人島になっていて、閉じ込められてしまっている先輩妖精がいる事を、玲一はまだ知らないく

「んあ… よく寝た。こんなに寝たのは久しぶりだよ」

羽織っていた制服をゴソゴソと退かしながら玲一が呟く。

昨日の夕方に最中（身長サイズ）を食べている為か、普通に活動できる。

『甘味があれば何でもできる』と言う神様の言葉は本物のようだ。

暑くもなければ寒くもない。例の冊子を読んでみることにした。

4ページ

ーエリート妖精は物理法則を無視してモノを作る事ができるのですー

??? 物理法則を無視? !

(; 㐂) メヲコスリ (((; 㐂)))

見間違いやなかつ

たーーーーく!!!!

「え、どうゆうこと、ん?」

ハラリツ…パサツ

玲一さんへ

4ページ目を読んだのですかあ。

早いですねえ。文だけでは分かりにくいと思うので私の手書きメモを送りつけるですう。

こうやって出来た部品を組み立てたり、加工して精度を高めたりして物を作るのですう。

あなたの場合、最後を丁寧に行うことで、どんどんパワーアップするですう。

頑張ってくださいですう。

「頑張ってくださいって…」

神様はふざけているのだろうか。でも、本当ならばものすごいことだ。

今まで製鉄所や精錬所、科学プラントなど、とても大掛かりな装置が必要だったものを、とても安価に作る事ができる。

ゴミ処理問題も解決する。素晴らしい。

.....だが神様は許さん。

試しにネジを作ってみた。砂を握り、100mm×50mmのオーステナイト系ねじを思い浮かべる。

確かに誤差があるものの、趣味程度の使用には全く問題がないくらいのものが出来上がった。

がしかし！ 玲一が使うのには荒すぎるのだ。彼の特別な所は、加工の精度である。

それを出来ない、ただのオールラウンダーになってしまう。

いろいろ作って見た。

- ・ 速力を15%アップする、大型翼
- ・ 破れにくくて乾きやすい、新しいつなぎ
- ・ 周りの様子を確認するための遠隔カメラと受信機

「まずは艦娘とやりに会わないと話にならないな」

その時だった。

近くの岩陰に自分と同じくらい的身長の、セーラー服を着た、妖精さん？が三人、こちらを覗き込んでいた。 岩一匹。チラツ はウツΣ（〇匹〇；）ミラレタ!!!

3話 先輩妖精？

妖精A（以下工廠妖精と表記）：「え、えりーと！」

妖精B（以下装備妖精と表記）：「ほんとうにいたのか、えりーと……」

妖精C（以下羅針盤妖精と表記）：「……」

どうかしたのだろうか。元気がないように見える。

大丈夫かなあ

玲一：「どうかしたの、大丈夫？」

妖精s：「「あああー」」

声を掛けた瞬間、妖精さんたちはかちんかちんに固まってしまった。そんな僕に声を掛けられたのが嫌だったのか。凹む。

……気まずい沈黙が数十秒流れた後、羅針盤妖精さんが口を開いた。

羅針盤妖精：「おなか……、すいたの……、だよお」

羅針盤妖精：「なにか、ください、なのだあ」

装備妖精：「だめだよえりーとのひとにもらってしまったら。えらいひとなんだからアセアセ

工廠妖精：「そうだよ。わるいよ…」

三人集まって話をしている。僕がエリート？だからか遠慮しているらしい。関係ない、と言うか知らないのだけどなあ。

玲一：「あのお、これ食べる？」モナカサシダシ

装備妖精：「それは…！」ジイ

工廠妖精：「ていとくやかんむす、いちぶのようせいしかかえないから…！」ジイ

羅針盤妖精：「まぼろしとまでいわれた、あのお…！」ジイ

妖精☒s：「いらこさんのさいこうきゆうもなか…!!!」ジユルリツ

妖精☒s：「はっ」

玲一：「ええーと、この最中ってそんなに珍しいものなの？」

妖精☒s：「…え？」

装備妖精：「まちがってたらわるいけれど、あなたはもしかしてはじめてこのせかいにきたひとか、ゲホツですか？」

玲一：「うん」

工廠妖精：「うーん」

工廠妖精：「そう、だったらこのせかいのことをせつめいさせてください」
何とありがたい申し出なのだろうか

玲一：「そんなに畏まらないでください。敬語も抜いてもらっていいですか？」

装備妖精：「そうかい。ではそうさせてもらおうよ」

羅針盤妖精：「あのお、はなしをもどすようであるんですけどお、なにかたべもの
くださいい：」グウウ

おっと、話に夢中になっていたら忘れてしまっていた。申し訳ないなあ。

玲一：「ああ、すみません。今渡しますね。」ヨウカンサンダシ

妖精s：「「ようかんくれる(の!?)」(くれるのかい!?)」(くれるんですかあ!?)」

玲一：「うん。一緒の方がおいしいでしょ。みんなで食べよ?」ニコツ

妖精s：「「ズッキューン」

ん?少し妖精さんたちの様子がおかしい。心なしか顔が赤いように見えるし。風邪
だろうか。

玲一：「ごめん、ちよつとごめんね」オデコクツツケ

羅針盤妖精：「はわわぁ」フリーズ

装備妖精：「」

工場妖精：「」

顔を真っ赤にして固まってしまった。僕なんか顔を近づけられてもどうって事ないだろうに。(彼は自分のことをブサイクだと思っっていますが、本当はとんでもないイケメンです。)

妖精☒s：「」フリーズチュウ

無人島からの脱出 ― 呉鎮への紀行

4話 く妖精さんとブラックな情報祭りく

大丈夫だろうか。固まってしまっているが…。

玲一：「ごめん、この世界のことを教えてほしいのだけれど…。」

妖精 s：「このひとくうきよめないの、それともただのどんかんなの!」

工廠妖精：「わ、わかりました、しんかいせいかんとかんむすがたたかっているのは
しっていますよね?」

玲一：「ああ、勿論」

工廠妖精：「では、かんむすにはていとくがひつようなのはしていますよね?」

玲一：「なにそれ初耳」

妖精 s：「」

装備妖精：「なにもしらないんだね…。」

装備妖精：「まあせつめいするとね、かんむすはていとくがないとはたらけないんだ」

そうなのか。勉強になるな。

工廠妖精：「だからね、かんむすがいないとたたかえないくせにじぶんがかんむすよりよっぽどえらいとおもいこんでしまっているといとくがいるんだよ」

玲一：「：： ああ」

工廠妖精：「ウツムキ

羅針盤妖精：「それでね、そういうといとくたちを”ぶらつくていとく”つていうんだよお」

その後も情報提供を行ってもらった結果、ブラック提督が指揮する鎮守府の実態が明らかになった。

例を挙げると、

- ・ 大破進撃を行う
- ・ 必要がない艦をおとりにして勝利する”捨て艦”
- ・ 艦娘の人身売買
- ・ 性的暴行を強いる

：：など、とても人道的とは言えない行為であり、絶対に許してはならないことだといふことはこの世界をよく知らない玲一にもよく分かった。

そして、彼の意味には関係なく、エリート妖精としての本能や誇りなどの為、それら

の提督を絶対に許してはならないと思うようになった。(玲一人もそのようにおもっています。)

玲一：「あの、そのブラック鎮守府にいる艦娘を救う為に僕ができることはあるかな？」

装備妖精：「あなたはえりーとだからきほんてきになんでもできるはずだが……。ほんとうにそうおもってくれているのかい？」

玲一：「ああ！当たり前だろう」

羅針盤妖精：「じゃあ、わたしたちのちんじゅふにきてもらっていい？」

玲一：「どうs……。そうか、すまなかつたな」

工廠妖精：「いや、いいのよ。そう、あたしたちのちんじゅふはいっぱんてきには……」

装備妖精：「うん、ぶらつくちんじゅふとよばれているところだよ……」

玲一：「……。そう、か」

話を聞くところによると、彼女たちは艦娘を守る為に提督に齒向かつた為にここに飛ばされ、1ヶ月の間無人島生活をおくっていたらしい。(此処はマリアナ諸島のどこかの海域)

玲一：「こんなことを言っているいい立場かどうかはわからないし、偉そうにするつもりもないが……。よく頑張ったな」ニコツキラリッ

妖精 s : 「」

妖精 s : カアア

忘れられかけられていた神様 : 「うんうん、うまくやっているようじゃないのお 感心。」

神様 : 「でもお、私のキャラとられたあ!!」

なお、神様は通常運行だった模様

5話　　く無人島からの脱出①く

玲一：「え、ここって無人島だったの!？」

羅針盤妖精：「いまさらですかあ」

工廠妖精：「てつきり知っているとばかり」

玲一：「すまない」

装備妖精：「いや、こちらもわるいんだ、きにしないでほしい」

玲一：「どうすればここから脱出できるだろうか」

装備妖精：「ふねかひこうきがあればいけるかもしれないね」

玲一：「えーと、船か飛行機を作ればいいと。」

妖精☒s：「ぼくぼくぼくちーん」

玲一：「あ」

く玲一説明中く　カクカクシカジカ

工廠妖精：「それなんでもできますね」

玲一：「うん」

ここに来て自分の規格外さが身にしみてきた。

羅針盤妖精：「ひこーき、つくれるう？ すいじょうてい」

玲一：「うん」

もうハイかYESしか言えてない。どうしようか。

羅針盤妖精：「それならてきにあわずにかえれるとおもうです」

工廠妖精：「じゃあいつしよにがんばろ？」

玲一：「ああー！」

～10分後～

とりあえず工具類を作っておいた。小さい工場並みに。工廠妖精が「わたしのそんざいいいぎは：」と言っていたが無視した。

工廠妖精に組み立てを丸投げし、工廠妖精の持っていた設計図通りに部品を作っただけ。飛行艇の作り方が分からないので、丸投げするしかない。

～さらに30分後～

工廠妖精：「できました。にしきだいでいすー！」

2式大艇が完成した。妖精やばい。あ、僕もか。

だが、いかに高性能とは言っても、大戦中の機体、性能が低いのは仕方ないところがある。

玲一：「（ハッ）を弄ってはどうかだろう」

結局、1時間以上かけていじり倒してしまった。装備妖精の助言を基に、装甲を捨て、速度を上げて回避率を上げまくった。

その結果、

耐久 1

装甲 3

回避 176

火力 0

雷装 0

対空 0

対潜 0

索敵 132

燃料 20

弾薬 0

と言う回避に徹したものが出来上がった。

玲一：「これでどうだ！」

工廠妖精：「馬鹿ですか？」

玲一：「え？」

装備妖精：「これでは、てきのかんさいきにやられてしまうよ」

玲一：「あ、そうか」

くさらに1時間後く

耐久 1

装甲 3

回避 163

火力 0

雷装 23

対空 88

対潜 0

索敵 132

燃料 20

弾薬 58

という機体が完成した。

装備妖精：「もはやだいていじやないけど、だっしゅつにはさいこうだよ!!?」
と言つてもらえた。やったぜ!

羅針盤妖精：「飛距離は大丈夫?」

玲一：「たまに着水して海水を汲めば燃料に変換できる」
妖精☒s」

工廠妖精：「どんななぞぎじゅつよそれ」

あなたも大概。

だから、

燃料 ∞（タンク満タンで20）

ということになる。あ、思ったよりエグいわ。

羅針盤妖精：「カタカタッ

羅針盤妖精：「10ちやくすいすれば、ちゃんといけるよ！」

とのことなので、最中を食べて明日に備えよう。

6話 く無人島からの脱出②く

玲一：「こんな感じはどうだろう」

先ほど挙げた数値を達成する為に、玲一は、

・防弾装甲を機銃攻撃を耐えうる程度まで劣化／軽量化↑紙装甲化

・火星シリーズの主機を、新型の試製彩型（誉三一型を実用化し、さらに妖精さんパワーで馬力を大きく上げた）に換装（4発全機）↑最高速度（240ノット）↓320ノット）

・燃料タンクの小型化、低容量化↑機動力、燃費の上

・フラップの増設↑旋回力のup

・雷装換装↑航空魚雷×2から250kg爆弾×12に換装↑小分けの方が臨機応変に扱える

・対空換装↑20mm機関砲を五門全門32.5mm機関砲に換装、また、7.7mm機銃も2門を破棄し、残り2門を10.25mm対空機銃に換装↑対空強化

・魚雷爆雷をポイー↑対潜攻撃パス

・玲一が（勝手に）作った計器類（試製R型対水上電探（有効半径63海里）、（試製

R型対空電探(78000m)、(試製伊号逆探)、(伊号則距儀)、(一式着水用レーダー)など。索敵値がやばいことになっている原因である

・海水と燃料変換機×2↑驚異的な移動距離の原因

・フロートを強化、防水塗装、シーリングを強化↑二式大艇の様に水をバケツで汲み出す、と言ったことが無いようになる

という大量の(普通の提督ならば目の色を変えて欲しかったであろう)装置を積み込み、もしくは換装し、

ここマリアナ諸島海域から、全速力で飛行すれば5時間で呉に着くヤバイ機体を作り上げたのである。給油は1時間きゆうすいに1回、つまり、トラブルがなければ大体一回の給水も10分ほどで終わるため、余裕を見ても、6時間ほどで呉に到達できる目処が立ったのだ。

装備妖精：「エグい…。こんなそうびみたことがない」

とのこと。当たり前です。今作ったのだから。工廠妖精が意気消沈しているのはまたもや見なかったことにした。

玲一：「使い方教えるよ。」

とりあえず測定儀の使い方と本体の操縦の仕方を念のため教えておいた。

装備妖精：「キラキラ

なんかキラキラしてる……。(物理的に)

次に、気持ち良きげに眠っている羅針盤妖精を叩き起こす。

羅針盤妖精：「ふみゆう」

玲一：「ペチペチ

羅針盤妖精：「スヤスヤ

玲一：「伊良子最中」コソッ

羅針盤妖精：「いっただきます!!?」

玲一：「よし起きたな」

羅針盤妖精：「あい」

彼女には、操縦のテクニクや機体の性質、装備妖精から送られてくる情報の読み取り方などを教えてゆく。

玲一：「わかったかな?」

羅針盤妖精：「うむう」

可愛いくくく。じやなつかた。うん。

簡単なテストをしておしまにした。

玲(零) 式大艇の表面にダズル迷彩を施し、対空電探、対水上電探を起動させ、警報

を鳴らせるようにしてから妖精ズを運び入れた所で、玲一のアドレナリンが切れ、ゾーンから抜け出したことで、彼は通れるように眠ってしまったのだった。

玲一：「いやいや」ペコペコ

（10分後）

玲一：「申し訳ございませんでした!!？」

工廠妖精：「もういいです…」（よくない！まったくよくない！はずかしすぎる！）キユウウ

羅針盤妖精：「だいじょうぶだよお」（どこがだいじょうぶなのお）バタバタ

裝備妖精：「うん、いっけんらくちやくだね」（してないよ？まったく！あれむじかくだからたちがわるいんだよ…）プシユウ

玲一：「すまない」

裝備妖精：「とりあえず、はやくちんじゆふまでかえらないと。あのひとたち、にゆうよもさせてもらえないまましゆつげきさせられてるかもしれない！」

玲一：「わかった。羅針盤妖精さん、航路を指定してください」

羅針盤妖精：「りよーかい」グルグル

羅針盤妖精：「あい」

羅針盤妖精：「ここからほくせいへ2500米キロ。40ふんもあればつくよ！」

玲一：「了解。ダズル迷彩を解除後、北西へ第一巡航速度の270ノット前進」

玲一：「その前に、大艇をどうやって海に入れよう？」

妖精☒s：「ずこっ」コケッ

装備妖精：「みんなではこべば？」

玲一：「そつか。頭いいね！」

妖精☒s「あれす？す？」

玲一：「なんかデイスられた気がする」

玲一：「そういうことなので牽引用の丸カンとロープを用意したよ。一つのカンにつき1人、頑張つて海までGO、だよ」

妖精☒s：「・・・」

妖精さんたちの努力の結果、玲式大艇は砂浜の広がる入り江にその身を浮かべるのだった。

玲一：「装備妖精さん、機関の調子は？」

装備妖精：「だいじうぶ、ぜっこうちようさ！」

玲一：「風向きは・」

装備妖精：「もんだいない」

玲一：「武装よし、安全装置よし」

羅針盤妖精：「えりーとさん、はつどうきおねがいますう」

試製彩は問題ない。シャフトよし、圧力よし、回転軸よし、過熱なし、うん、問題な

い。

玲一：「クランクいきます！」カラカラカラ

玲一：「点火：回転安定、回転数よし」

玲一：「羅針盤妖精さん離陸許可します」

羅針盤妖精：「りよーかい、りりくします！」

装備妖精：「しんろしゆうせいもとむ」

羅針盤妖精：「りよーかい」

装備妖精：「にどかいとう」

羅針盤妖精：「にどかいとうりよーかい」

玲一：「エンジン離水則。水切りルーバ起動」

羅針盤妖精：「りよーかい」

工廠妖精：「りすいかくにん、だいいちじゆんこうきそくかくくにん」

玲一：「ご苦労様でした。念のために、対空電探と対水上電探を起動しておいてください

い。対空電探は僕がやります」

装備妖精：「でんたんきどう」

玲一：「電探起動：何」

10機ほどの艦攻が真っ直ぐこちらに飛んできていた。

8話 鉄の雨

玲一：「電探に敵機確認。装備妖精さん、則距儀と機種判別お願い！」

装備妖精：「とらえた、きより五二〇〇！かんこう10き！」

玲一：「よくやった！工場妖精さんに渡して10・25m機銃を頼む！」

工場妖精：「わかったわ！」

装備妖精：「りようかい、これおねがいね」

装備妖精：「えりーとさんは？」

玲一：「僕は、32・5m機関砲を担当する！」

工場妖精：「てきききより三四〇〇！」

玲一：「羅針盤妖精さん、最大戦闘機速！340ノット！」

羅針盤妖精：「340ノットりようか：は？」

玲一：「彩は負荷をかければ問題ないように作つてある！フルスロットル！」

羅針盤妖精：「りようかい」

玲一：「敵機距離は？」

工場妖精：「だいたい一〇〇〇！」

玲一：「機関砲掃射開始！」バラバラララッ

工廠妖精：「きより一二〇〇ッ」

玲一：「引き続き掃射ッ！」ズダダダダッ

工廠妖精：「きより五〇〇！」

装備妖精：「10・25mmきじゅうのゆうこうしゃていにはいった！そげきするっ

！」バラバラララッバラバラララッ

玲一：「了解ッ！」

工廠妖精：「3機撃墜確認！」

工廠妖精：「1機機銃弾にて撃墜を確認！」

7. 7mm機銃の弾が当たっている音がガンガン響く。だが、軽量化したとはいうものの、対弾装甲は伊達ではない。きちんと弾いていた。その時、羅針盤妖精の切羽詰まった声が聞こえてきた。

羅針盤妖精：「敵機噴進弾の接近を確認！回避！」

即刻、さらに2機を撃墜したものの、まだ残っている、とおもっている、

工廠妖精：「きより七〇〇、こうどゆうい！」

玲一：「装備妖精さん、機銃をしまつて機関銃をお願いします！」

装備妖精：「了解したよ」

この地点から250kg爆弾を落とすべく、射出用意を行う。必ず落とせるはずである。

工場妖精：「きより三〇〇」

いまだっ

玲一：「くっ」バシユウ

羅針盤妖精：「ひがいじようきようほうこく、そんなしょうけいびー!」ニコ

玲一：「よくやった!」

工場妖精：「きよりぜろ、250kgばくだん、2だんちゆう2だんちやくだんかくにん、1きゆうばくかくにん、ぜんきげきつかくにん」

玲一：「よし。羅針盤妖精さん、最大機速のまま海域から離脱せよ」

羅針盤妖精：「さいだいきそくりようかい」

玲一：「電探に感なし、軌道修正、回西30度」

羅針盤妖精：「かいせい30どかくにん、りようかい」

玲一：「第一巡航機速で前進」

玲一：「対空を厳として飛行を継続せよ」

妖精s「りようかい!!?」

この後暫くの間対空電探を用いて観測を繰り返したが、敵機らしきものは発見され

ず、一行は一時の安全に身を委ねたのだった。

9話 着水用意!!?<

装備妖精：「そくきよぎかわるよ」

工廠妖精：「ありがと、やつぱりせんぞくじゃないとむずかしいわ」

～30分後～

玲一：「機銃の弾がない」

装備妖精：「作ればいいじゃないか」

玲一：「あ、そうか」

結局予備の燃料として積んでいた海水（燃料に変えてからでは誘爆する危険があり、海水のままドラム缶に詰めて載せていた）を弾と弾薬に変換して装填した。

装備妖精：「しこくほんとう、でんたんじょうにかくにん」

羅針盤妖精：「じかんできにもねんりょうのへりぐあいてきにもまちがいないわあ」

装備

羅針盤妖精：「ねんりょうのこり3000?、かいすいのほきゆうをもとめますう」

玲一：「これ以上飛ぶとどうなる?」

羅針盤妖精：「このままのそくどだとお、あとさんじゅつぶんもとべないかと」

玲一：「海水ドラム缶はどうなっている？」

工廠妖精：「ひとかんしかありません、えりーとさん」ヒョコ

やはり燃料タンクを削って機動力をあげた借りがここで帰ってきている。弾薬にも変換してしまつたから予備の海水も残っていない。どうするか。

玲一：「飛び続けて急ぐべきか、一度海面に降りて補給するべきか、みんなの意見を聞きたい」

羅針盤妖精：「このまませんとうになるきけんをかんがえたと、たしよあぶなくてもおりてほきゆうするべきと思うのですう」

装備妖精：「このふきんはせんすいかんがあるからね、おりるのなら夜におりるのはやめた方がいいとおもう」

工廠妖精：「くわしいことはわからないけれど、きたいのせいのおうてきに、よるにはおりられないわよ？」

玲一：「飛び立つのは？」

装備妖精：「もんだいないなね」

玲一：「それならこうしよう」

玲一が出した案はこうだ。

1. あと一時間ほどで日が暮れるので、はやく着水し、海水を補給する

2. 艦娘と深海棲艦のどちらにもバレないようにしながら日の入りギリギリまで待機

3. 日が落ちる寸前の時に、赤外線誘導装置玲型（↑開発した）を使用、飛翔を開始し、呉軍港ではなく、戦争初期に打ち捨てられた豊島港沖に着水

4. 玲式大艇の内部強化バルジを解体し、大発玲型（発動機は試製彩）を作成、海岸に玲式大艇を係留したのち、海水と燃料変換機、小型陸上電探（対水上電探、対空電探の、それぞれ発信部＋受信部、演算装置を2コイチ）を持ち、呉軍港近海にでる

5. あとは艦娘に発見されるのを待つ

玲一：「他にいい案がある人は？」

羅針盤妖精：「もうえんじんしゅつりよくがおちてきているので、それでけっこうしますう!!?」

玲一：「わかった。エリートとしてここで落ちてはかなわない」

玲一：「則距儀、対水電探用意！」

妖精☒s：「りようかい！」

10話　　玲式大艇、着水す！

玲一：「エンジン一速、2、3番エンジン停止」

羅針盤妖精：「えんじんていしりようかい」

油を節約するために、エンジンを2発に、速度は、回避能力を落とすものの第一速。電探によると、付近海域には敵影無し。何とかなるだろうか？

装備妖精：「すいめんまですいちよく230、すいへい780！」

玲一：「照明弾投下」バシユツ　ブワツ　ペカツ↑作った

玲一：「フロート展開！」ギリギリ↑これも作った

装備妖精：（えりーとさんのすることはいちいちきかくがだよ）

工廠妖精：（ふろーとなんてつくったことないわ）

もうすぐ水面である。普通に早くないか。などと考えていると、

装備妖精：「きよりぜろ、ちやくすいする！」

という声で現実には引き戻された。速度計は　〃10ノット〃を指していた。この速度で動力降下して無事な船体が謎だ。廃材から作ったようなものなのに…。

羅針盤妖精：「くちくいきゆうせつきん！ほうげきもとむ！」

駆逐イ級が来たらしい。多分大丈夫。落ち着いていこう。燃料を積めれば戦える。

玲一：「羅針盤妖精は工廠妖精と海水をドラム缶3個に詰めて、待機状態!」

玲一：「装備妖精は250爆弾を噴進砲装填! 発進できたら発射!」

妖精☒s：「りようかい!」ドタバタ

羅針盤妖精：「えりーとさんは?」

玲一：「僕は砲撃を、羅針盤妖精さん、この機体は、イ級の副砲1発で沈みます。海の上だと浮く的です。気をつけて」

羅針盤妖精：「わかったですう、ごぶうんを」

玲一：「ありがとう」

とは言ったものの、この装備は主に対空戦、それも戦闘機・攻撃機・爆撃機・水上機などの飛行機を相手に取るための装備か。かろうじて250爆弾はぶら下げているものの、魚雷や噴進弾は装備していない。航空爆弾では前に飛ばせないため、主な攻撃手段は機関砲だな。

く別次元く

忘れられかけている神様：「最近出番がない…」

神様：「気を取り直して説明するよお」

神様：「装備されている32.5mm機関砲の射程はおよそ3000mなんだけどお、

11話 ㄱイ級攻防戦ㄱ

ㄱ深海棲艦艦載機との戦闘後ㄱ

玲一：「32. 5mm機関砲の弾を変えられるようにしよう」

32. 5mm機関砲の弾丸は、通常弾、徹甲弾、小散弾、曳航弾、PETN（高性能榴弾）、焼夷弾の六種類があつて、隠密行動を行う玲式大艇としては、敵に機関砲の弾道が読まれ自らを発見される確率が高まる曳航弾は論外。焼夷弾は機関砲の弾として使用するには扱いづらいな。

撃ち尽くさないと新しく換装できないのも面倒臭いし、第一戦闘中にそんなことしてたらやられる。

玲一：「よし、弾丸ベルト方式に改造して弾を換装できるようにしよう！」

通常弾ベルト―50発3本、徹甲弾ベルト―36発2本、小散弾ベルト―36発2本、PETNベルト―30発3本、曳航弾（威嚇用）―10発1本を積んでみた。

攻撃も迎撃も対空も30. 5mm機関砲にお任せっ！↑某重巡風

玲一：「うん、これでOK」

ㄱイ級戦闘に戻るㄱ

玲一：「1番砲、徹甲弾装填・2と4番砲、通常弾装填」

玲一：「距離確認、2，3，4番砲でええええええ！」バシユバシユバシユバシユよし、通常弾による飽和攪乱攻撃は成功している。ここで一気に決める！」

玲一：「1番砲、目標駆逐イ級、距離……」

装備妖精：「78」

ありがたい。

玲一：「距離78、てえええええ!!」ダアンダアン

1ベルトの半分の18発を撃ったあたりで、駆逐イ級は海の底へと沈んでいった。

うん、自画自賛になるけれどさすが僕。そして結局飛ばない玲式大艇。聞いてみようか

羅針盤妖精：（しようめいだん…、けつきよくあがらなかった。とべるわけないよ
おお）

工廠妖精：（このねんりよう、どうやっているの？おーばーてくのろじーよ…）

装備妖精：（は、つきじゆうそうしやにむちゆうになつてしようめいだんあげわすれた）

玲一：「羅針盤妖精さん、玲式大艇飛ばないのだけど」

羅針盤妖精：「しようめいだんあがらなかったあ」

玲一：「ジー

装備妖精：「うっ、たしかにきじゆうそうしやにむちゆうだったことはみとめるけど…。そもそもしようめいだんもらつてないよ？」

工廠妖精・羅針盤妖精：「ジー~~~~~」
おおっと、忘れてた。ごめんよ。こういつた時は、

玲一：「申し訳ない！」ジャンピングドゲザ

工廠妖精：「う、うつくしい」

装備妖精：「なんか、きれいだ…」

工廠妖精：「じゃなくて、とぼ？」

装備妖精：「あ」

羅針盤妖精：「あ」

玲一：「あ」

玲一：「はい照明弾」アセアセ

装備妖精：「ありがとう、じゃああげるよ」アセアセ

このようにして玲式大艇は離水して行ったのだった。

バシユツ

12話 恋する乙女（妖精）

羅針盤妖精：「ま、まさかあんなことを言われるなんてえ??、あたしたよりになんてえ???、どうだったらうれしいけどお??、でもお??」オトメノカオ

装備妖精：「なにかあったのかい？」

羅針盤妖精：「えーとねえ、えへへえ」トロ

装備妖精：「だめだこりゃ」タメイキ

「話はしばらく前まで遡る」

玲一：「こんばんは。すみませんこんな時間まで操縦してもらって」

羅針盤妖精：「ふあっ」ビツクリ

玲一：「こんな時じゃないと言えないので言っておきます。ここまでついてきてくれてありがとうございます。呉鎮守府を救うために、これからも力を貸してください。あなたがいけないと駄目なんです」

羅針盤妖精：「??」セキメンナジヨウキ

玲一：「ではでは」バイバイ

羅針盤妖精：「ポー

羅針盤妖精：「あおばさんいないよね」ブンブン

羅針盤妖精：「ポー

工廠妖精：「ていうことがあったんだって」

装備妖精：「なるほど」

工廠妖精：「でもあのかおどうにかしたほうがよくない？」

羅針盤妖精：「オトメノカオ

装備妖精：「ああ、なんとかしたほうがいいね」

工廠妖精：「どうしましょうか」

羅針盤妖精：「えりーとさん：」ムニヤムニヤ

装備妖精：「あまーい」サトウダバー

工廠妖精：「すごくあまーい」サトウダバー

二人：「あまーい」サトウダバーダバー

神様：「純粹ね」

玲一：「あいつらなに話しているんだ」

玲一：「操縦者誰だと思ってるのか…」

玲一：「ていうか落ちてる落ちてる！エンジン臨界！フルスロットル！」

く少ししてく

玲一：「機体角度よし、高度三〇〇、第一巡航速度」

ここらへんで降りてしまおうか。妖精さんたちを起こしてと。

玲一：「夢の世界にいる妖精さんと若干二名の砂糖吐いてる妖精さん、起きてくださいな」

高度計：チャクスイシマツセ

工廠妖精：「ふあ」

装備妖精：「ふあ」

羅針盤妖精：「わあああ」

こうして豊島沖に降り立った玲式大艇は静かに羽を休めるのであった…

玲一：「なにを勝手に終わらせようとしているんじゃないぞけん！」

玲一：「…失礼いたしました」

ここからは工廠妖精さんに頼ることが多そうだ。でも彩エンジンそのもの使ったことないだろうし…。

玲一：「大発玲型作るぞ！」

玲一：「工廠妖精さんはバルジ部分の鋼材ひっぺがしてきて」

工廠妖精：「りようかい」

装備妖精：「ぼくたちはなにをすればいいんだい？」

玲一：「それぞれ電探を使って敵を見張って」

妖精☒s：「りようかい」

玲一：「あ、装備妖精さんはそれと一緒にこれもお願い」レイシキチヨウオンキ

ふふ、飛んでいる間に作っておいた玲式水中聴音機（4式水中聴音機の2倍の感度、

1.5倍の索敵半径を持つ。ソナー）があるのさ。潜水艦への対策もバッチリだね。

装備妖精：「なにこれすごい」ビツクリ

13話 大発紀行

〈装備妖精視点〉

らしんばんちゃんがとろけているよ。ほんとなんなんだろ。

ん、でんたんをつかっててきをみはればいいのかい、かんたんじゃあないか。うんう

…

玲一；「あ、装備妖精さんはそれと一緒にこれもお願い」レイシキチヨウオンキ

なんかおしつけられた。れいしきすいちゆうちようおんき？　・・・おーぱーつだ

ぜー！

は！ きやらのきき！　しつれいしたね。

せつめいをうけておーぱーつぶりがよくわかったよ。いまさいしんえいのよんしきとくらべてもやばい。

装備妖精：「なにこれすごい」

ま、つかつてみようか。ちやぼん。

装備妖精：「ひええー!!」コンゴウガタニバンカンポイワ

おとしつれい。でもこれはやばいね、あつとうてきなせいどとさくてきはんい、つかうときもきそができればはじめてでもわかるせつけい。えりーとさんていつたい？

ポーンポーン ↑ソナーの音波

く玲一視点へ戻るく

装備妖精：「ひええー」

お、このソナーの凄さがわかったようだね。ふふふふつ。さすがはぼくが作った装備

：

工廠妖精：「はいこれ。ぞうせつばるじとしせいいろどりよー」

はやつ!!なに早い。そうか、妖精さんパワーか…↑現実逃避

工廠妖精：「えりーとさん？」

玲一：「なんでもないよ、ありがとう」

工廠妖精：「このていどれでいのたしなみだわ！」

玲一：「ウンウンサスガダナー」

玲一：「それじゃあ組み立てていきますか！」

く工廠妖精視点く

なんかしんないけどうきどつくがつくられていた。え、なに、このえりーとさんはあたりまえのようにやばいものつくるの？うきどつくなんてみたの、けんしゅうのときに

クを削り、瑞星エンジンと同等レベルのサイズで1200馬力と妖精技術を結集したようなものになっている。

スクリューの技術はないため、大艇のプロペラを流用する形でホバークラフトのよう
に後方に大きなプロペラが付く容姿となっている。これは銃弾を巻き込まないために、
防弾カバー（当然自作）がついている。

工廠妖精：「いちいちきかくがいなのよ！」

装備妖精：「そんなにやばいのかい？」

工廠妖精：「やばいってもんじゃないわよ！ふつうあれをかいじょうでいちからくも
うとおもったららひとつきはゆうにかかるわよ」

装備妖精：「・・・」

14話 玲式陸上無線電話機

暗闇の中一時間、そこにあつたのは…

玲一：「できたよ…」バタン

疲労で倒れ込む玲一くと、

妖精s：「・・・」アゼン

魂が抜けたようになって彼を見つめる妖精さんたちであつた。

く装備妖精視点く

妖精s：「・・・」アゼン

えつと、なんでもうかんせいしているんだい？

ちよつとじょうきようをせいりしてみようか。

・えりーとさんがれいしきだいていをばらしてせんたいにかえた↑えりーとさんだも
ん

・えりーとさんがうきどつくをつくつていた↑ぎりわかる

三式空一ノ無線電話機を改造した玲式陸上無線電話機です。コントローラのスイッチにできることが書いて有ります。呉鎮守府と連絡を取つてはもらえませんか？

装備妖精：「なるほどね」

工廠妖精：「なにかわかつたの？」

装備妖精：「これつうしんき。鎮守府と連絡をとれだつて」

工廠妖精：「ふうーん、そうびさんつかえるの？」

装備妖精：「もちろん」

わたしだつてそうびようせいのはしくれ、このていどのつうしんきつかいこなさなければならぬ！さらにわたしもだいほんえいでけんしゆうじこくのとつくんをうけたすーぱーようせい。そのちから、みせてやろう！

装備妖精：「はっ s …」（発信と言おうとした）

工廠妖精：「あつ」モイツカイペラッ

装備妖精：「…めもだね」

追伸

連絡を取るのには艦娘の方だけ。今から書くことを伝えておいて。

- ・これから大発動艇で向かうこと
- ・鎮守府の詳しい座標を送って欲しいこと
- ・埠頭に案内をお願いしたいこと

よろしくたのみます

ちよつとさえぎられたけどかんけいがないよ！

あかしさんに、

装備妖精：「シユウハスウアワセ
ならつたとおりに

装備妖精：「アンテナタテテ
すればいい！

装備妖精：「すいっちおん!!？」カチ

キュルキュル ザザツザザザーザー キューンキューン ザザツザ

ザー

?? キ
: ュ
『 ー
・ ン
・
』 ガ
ガ
ツ

15話 鳳翔さんと鎮守府 玲一側

〔裝備妖精 side〕

?? : 『はい、こちらくれだいいちちんじゅふ、どうぞ』

こえにはきがないし、ただたんたとようけんだけをじむてきにつたえてくるようなこえ、やばそうだね。

裝備妖精 : 『こちらくれようせいたい、だいいちさくてきしようたいしせいけいいうんとうじようぶんたいのそびようせいです、どうぞ』(こちら呉妖精隊、第一索敵小隊 試製景雲搭乗隊の裝備妖精です、どうぞ)

?? : 『・・・』

?? : 『(きこえない)』

?? : 『もしもし、接続確認求む』

あ、ぼくたちふつうのようせいのかえはきほんてきにきこえないんだった、しくじつたね。

裝備妖精 : 『えりーとさん、えりーとさん』

裝備妖精 : 『おきて』

えりーとさんが起きないことにははじまらないよ。

玲一：「ん、」

装備妖精：「れんらくついたよ」

玲一：「うん」

装備妖精：「かわって？」

玲一：「??」

装備妖精：「ふつうのようせいじゃあひとやかんむすとはなすことができないんだ」

玲一：「・・・」

玲一：「ん？」

え、・・・あ、このひとよくしらないんだった。ぼくとしたことが・・・。

装備妖精：「・・・とりあえずつうしんかわって、せつめいはあと！」

玲一：「ああ・・・」 キキウケトリ

〈玲一 side〉

玲一：「変わりました、五十嵐と申します」

??：『ああ、はいこちら鳳翔・・・』

なんだろう、やっぱり声に生気がないし、どこか疲れている印象を受ける。

??↓鳳翔：「あのく、なぜこの回線から男性の音がするのでしょうか」

玲一：「えつと、妖精さんの交信機の周波数で、ということですよね？」

鳳翔：「はい」

玲一：「すみません、考えが至らず。私妖精です」

鳳翔：「すみません、少々お待ちください」

混乱している様子だ。無理もない。自分が転生してきたというのは黙っておいた方がいいな。うん。

鳳翔：『どうぞお続けください』

玲一：「私はエリート妖精という種類の妖精でして、人や艦娘と会話できます」

鳳翔：『あの！そこにうちの妖精はおりますでしょうか』

あ、あの子たちかあゝ

玲一：「念のためにどんな感じか言って貰って宜しいでしょうか」

鳳翔：『えーと、落ち着いた感じの僕っこと、』

装備妖精さんだね。

鳳翔：『ちよつとつたない感じの“ですう”と語尾に付くこと、』

羅針盤妖精さんだわ。

鳳翔：『ちよつとぬけているところのあるきちんとしてるこなんですけれど』

たぶん工場妖精さんでしょう。

鳳翔：『そちらにおりませんか？』

玲一：「いますよ」

鳳翔：『良かった』

安堵している様子がかがえる。

鳳翔：『いまどちらに？』

玲一：「豊島港沖三〇〇程に」

鳳翔：『何かに乗っておられるのでしょうか？』

玲一：「私の作った大発動艇玲型に」

鳳翔：『??… ああ、妖精さんでしたね…』

玲一：「はい」

玲一：「これからそちらにむかいますので」

玲一：「誰か案内とよろしければ座標をお願いします」

鳳翔：『#34。13' 52.6" N 132。32' 41.9" E#です』

鳳翔：『では母港におりますので…』

プツツ ザツザザーザザー

玲一：「よし、」

工廠妖精：「れんらくついたわね！」

玲一：「ああ！」

そういえば名前とかしつかりきいてなかったな、

装備妖精：「じゃあ」

玲一：「ちよつとまって」

玲一：「名前、ちゃんと教えて？」

装備妖精：「くれようせいいたい、そうびぶ だいいちさくてきしようたい のそうびよ

うせいだよ、そうびようせいってよんでね！」

へー、偵察隊だったのか、

工廠妖精：「くれようせいいたい、こうしようぶ かいはずこうしようしよ

きかんぶんたいちしようのこうしようせいよ、こうしようせいってよんでよ

ね！」

え、工廠の機関分隊長!?やべー

羅針盤妖精：「くれようせいいたい、そうびぶらしんばんぶんたいちようのらしんばんよ

うせいだよお、らしんばんようせいってよんでねえ」

羅針盤分隊長!! いなくなったらやばそうだな。。。。

玲一：「そうか、なにはともあれ、改めてこれからよろしく頼みます」ペコリ

16話　　く大発動艇玲型の力く

玲一：「じゃあ大発に乗り込んでくれ。装甲甲板の中央部にエレベーターが設置されているから船内に入ってくれ」

ふふ、いくら装甲が頑丈でも甲板の上にいた場合やられるのは当たり前。そこで、空母に搭載されている艦載機用エレベーターを転用、頑丈な甲板を有し、危険を限りなく抑えるのだ！

羅針盤妖精：「りようかい」

工廠妖精：「これは、くうぼの…」ブツブツ

玲一：「それでは発進する！装備妖精さん、甲板上に出てクランクお願いします！」

装備妖精：「リヨウカイ

く装備妖精 side」

えりーとさんからくらんくいんをたのまれたよーうらー！

装備妖精：「たぶんこのへんに… あった。てまわしくらんくね」

いつも使ってるよ。ふじちやくくんれんもしてるし。でもこのそうちはみたことがないね。まあ、

装備妖精：「くらんくはじめ、いち、にい、いちにさん！」プスツ、カラカラカラ
 ラララ：

装備妖精：「よし」

じゃあ船室に戻ろうか。えりーとさんもまってるし。

玲一 side

エンジンの暖気が働いて暖まり、バラバラバラと小気味いいをたててプロペラが回転を始めると、装備妖精さんが戻ってきた。では、

玲一：「天候良好、発動機問題なし、総員確認、発進!!？」

妖精s：「わー」

ここらへんでこの船の解説をしておこうか。大発玲型、スペックは下記を参照しても
 らいたい

耐久 3

装甲 5

回避 2 1

火力 3 7

雷装 4

対空 0

対潜 0

索敵 1 (玲型・玲式シリーズ込みで58)

燃料 ∞ (タンク容量2)

弾薬 8 (各弾薬ベルト1本)

基本兵装は玲式大艇からひっぺがした32.5mm機関砲2門。さらに威嚇用7.7mm機銃も1機増設されている。もとの兵装がそこそこ強いため、主攻撃として搭載しても大丈夫。妖精さんパワーである。不思議だなあ、僕もか。さらに、艦娘に攻撃されることを考慮し増設した7.7mmには非殺傷の曳光弾175発ベルト3本も装備した。32.5mmには今までのベルトを積めるだけ積む。具体的には、通常弾1本徹甲弾3本、PETN3本。的が航空機ではなく艦艇、それも深海棲艦ともなれば貫通できる徹甲弾と爆発して損害を与えることのできるPETNをガン積みするのは当然の結果か。

さらに250kg爆弾をもとに魚雷改造を施した改爆単装(通常)魚雷×2。艦首付近に装備。250kg爆弾改造品の為、威力は低く駆逐級を中破させるのが関の山である。弱い。カットインに使って敵の目を逸らすことくらいにしか使えないかもしれない

い。

「索敵はできず、対深海棲艦用としてはサイズが大きいい、ならびに推進がホバークラフトのため、回避率は高くない。オヨヨ。ただ、索敵は玲式シリーズが大量にあるためあまり困らない。さすが僕。妖精さんに感謝しておこう。」

乗員は60sm級妖精四人？一人二人と数えられるのか謎だなあ。35sm級妖精さんだつたら一人操縦の60sm妖精さんを残して五人。

「速力は大発動艇にしては速い18ノット。時速にして33.3くらいかな。ちなみに大発の最終形である大発D型の最高速度は9ノットなのでおおよそ2倍となるな。」

耐久装甲は：沿岸部をぬって移動すれば見つからないから大丈夫、だと信じたい。
e
lite、flagshipクラスや軽巡級以上が現れたらやられるが。

こうして一行は漆黒の水平線へと漕ぎ出すのだった。その空に、星は、見えない。

17話　　鳳翔さんと鎮守府　　鳳翔側

（side 鳳翔）

提督が異動された後今の提督に代わってもう一年近く経ちます。前の提督はよくしてくれましたし、鎮守府にはいつも駆逐艦や海防艦の笑い声が響いていたのですが…。今の提督は、控えめに言っても最低です。特に駆逐艦や潜水艦の子たちは…

ザザッ

ん？この回線は、…もうあの子たちが提督に沈められてから使われていない、筈。どうして？とりあえず大本營の方や人間さマダツたらまたせたら…

鳳翔：「はい、こちらくれだいいちちんじゅふ、どうぞ」

??：『…』

なんで誰も出ないのでしょうか？

??：『…』

だめですね。聞こえません。

鳳翔：「もしもし、接続確認求む」

うーん、何故でしょうか、声が聞こえるような気もするのですが。気のせいですか。

まあ良いです。提督は今頃パチンコにでも行っているはずなので時間はいくらでもあります。あちらさんから何か反応が返ってくるまで待ちましょう。

く一分後くらいく

??：『変わりました、五十嵐と申します』

五十嵐サン? そんな人いたかしら? そもそもなぜ呉妖精隊 索敵偵察部隊の無線が? あの子たちは大丈夫なの? わからない。

鳳翔：「ああ、はいこちら鳳翔…」

鳳翔：「あのく、なぜこの回線から男性の声がするのでしょいか」

五十嵐：『えっと、妖精さんの交信機の周波数で、ということですよね?』

鳳翔：「はい」

玲一：『すみません、考えが至らず。私妖精です』

わからない。ちよつと意味が…。

鳳翔：『すみません、少々お待ちください』

うーん、だめですね。まあこの人の話を聞いてみたらあの子たちの情報が少しは手に入るかもしれないですし、まあ。

鳳翔：「どうぞお続けください」

五十嵐：『私はエリート妖精という種類の妖精でして、人や艦娘と会話できます』
ふあつ？ エリート妖精？ 妖精さんにそんな名前の子いたかしら？ うーん、

鳳翔：「あの一！そこうちの妖精はおりますでしようか」

五十嵐：『念のためにどんな感じか言って貰って宜しいでしょうか』

情報を与えて大丈夫だろうか？ まああの子たちの安否の確認と比べたら、うん。仕方ない。

鳳翔：「えーと、落ち着いた感じの僕っこと、」

鳳翔：「ちよつとつたない感じの〃ですう〃と語尾に付くこと、」

鳳翔：「ちよつとぬけているところのあるきちんとしてるこなんですけれど」

鳳翔：「そちらにおりませんか？」

五十嵐：『いますよ』

鳳翔：「良かった」

とりあえず第一関門クリアですね。でも嘘を付いていることも十分に考えられます。気を引き締めてゆきましょう。

鳳翔：「いまどちらに？」

五十嵐：『豊島港沖三〇〇程に』

ん？

鳳翔：「何かに乗っておられるのでしょうか？」

五十嵐：『私の作った大発動艇玲型に』

鳳翔：「??:. . . ああ、妖精さんでしたね. . .」

五十嵐：『はい』

そういえば妖精さんってそんな感じでしたね。目を離すと色々作り上げたりとか。資材をどうしているのかはわかりませんが。最近では妖精さんもいなくなつて、身振り手振りで甘味をたかる姿も見られなくなりましたから. . .。

五十嵐：『これからそちらにむかいますので』

五十嵐：『誰か案内とよろしければ座標をお願いします』

言つてもいいのかしら?でも. . .

鳳翔：「#34。13, 52, 6”N 132。32, 41, 9”E#です」

鳳翔：「では母港におりますので. . .」

プツツ ザツザザーザザー

鳳翔：「風向き、よし。索敵部隊、爆撃隊、発艦！索敵部隊を優先してください」

鳳翔：「旧型ですが、私の家族に手出しはさせません！たとえ矢を撃ち尽くそうとも、沈められたってあの子たちを守ります！」キリッ

早くも不穏な空気が流れる、次回、『玲一死す！』デュエルスタンバイ！

18話 くブラック提督の天敵く

く大発がでて五分後くらいく

玲一：「装備妖精さん、操舵変わってもらっていいかい」

装備妖精：「うん、いいよ、なにかかんがえごとでも？」

玲一：「まあそんなところかな」

どうやって呉の提督を消そうか。前の世界の漫画とかだと、悪役を殺して退散↓英雄となる、とかが一般的だけでも。現実でやったらこつちが悪役に仕立て上げられてやられるのが当たり前だろう。だったら刑法とかに従って裁判で潰すのがいいか。おそろく自衛隊は日本海軍になっているだろうから軍事裁判もできる。

玲一：「羅針盤妖精さん、海軍法と刑法の一覧ある？」

羅針盤妖精：「あい」

玲一：「ありがと」

よし、使えそうな法律探そ。

少しだけ読んでみたけど、やはりその提督とやらは相当軍紀やら刑法やら海軍法やら

を破っちやてるばいね。最低でも多分だけでも懲役30年とか、普通にいくと思う。

あとは：証拠か。そういう悪い輩ほど後ろに大物がいるとかヤバい組織と繋がってたりするんだよなあ。かのj：いや：#を狙ってきた：いや忘れよう。今は関係ない！

まあ、とりあえず作りますか。無かったらとりあえず作るって思考がおかしいなおい。少しずつ妖精っていう器？に馴染み始めてるよ。はあ。

作ったもの

- ・盗聴器（三口タップ型15機、隙間型15機、艀装内蔵型50機）（耐水・耐塵）

- ・小型カメラ（壁面埋込型60機、隙間型85機、艀装内蔵型50機）（耐水・耐塵）

それぞれ1ヶ月ほどはサンプリングレート96KHz、量子化ビット数24Bitの超高精細音声と1080pの高精細映像とを記録し続ける。エグツ！これを工廠の妖精さんに協力してもらって、

- ・執務室

- ・会議室

- ・廊下

- ・建物の裏

- ・艦娘寮

・提督の私室

・艦娘の艤装

とかに設置。ついでに某使い捨てカメラ（FUOIFILM社の大ヒット商品。コンピニとかに売ってる。）をとにかくたくさん。これは現像できる設備がないと確認できないから提督にバレても問題ないし、水没したりして乾かせば撮ってあるものは無事なことが多い。素晴らしい、写〇ルンです！

さらに、通信機器（服の下に隠せるレベル。SOSとかに使う）も、50機用意！完璧！

：口をアングリ開けて、『わたしのそんざいいぎ…』と言っている工廠妖精は見なかったことにしよう、うんそうしよう

そんなことをしている間に飛行機が飛んできた。妖精サイズだけど。

玲一：「あれは何？何機かいるけども」

装備妖精：「くれのしようかいきだよ、いろいろみるとほうしようたいのさくてききだね。ゆうどうしてくれるとおもうよ。あと：こうげきたい。・・・こうげきたい！???
え？」

困惑しているご様子。多分敵とみなされてるんでしょ。説明するか。

玲一：「あ、僕たちが本当に味方かどうか、そもそも妖精自体がよくわからないのだから？」

羅針盤妖精：「うん」

玲一：「第一君らが言っていただろう。妖精は人や艦娘と話すことができないのだから？」

工廠妖精：「・・・うん」ズーン

玲一：「第一艦娘と会話できる男の妖精など怪しまれるし、普通の人間だと思われる可能性が高い。」

装備妖精：「そうか、みかたかわからないからそなえているのか」

どうやらわかったらしい。

玲一：「そ、偵察機である程度見極めてから雷撃してくる可能性が高い。その証拠に二式偵察機一機に九七艦攻五機できている。」

装備妖精：「なんだって！」アオザメ

工廠妖精：「うそ・・・」ブルブル

玲一：「そんなに強いのか？」

装備妖精：「ほうしようさんでしょ・・・。あのにしきていはぜろでかかってもしんでんやしでんかいでかかってもおとされるんだよ？偵察機なのに・・・」

羅針盤妖精：「あの九七かんこうもやばいってものじゃないよお。こうかくほうにこ
うしやそうちつけてもあたりまえのようにかいひされてさいてきないちい…たとえば
すくりゆうとかあ、だんやくこ、ねんりようたんとか」

玲一：「・・・よし、白旗」

妖精☒s：「さんせい!!!!!!」

間髪を入れずに賛成の声が返ってきた。ちよつとびつくりしたよ。

諦めはだいじ。